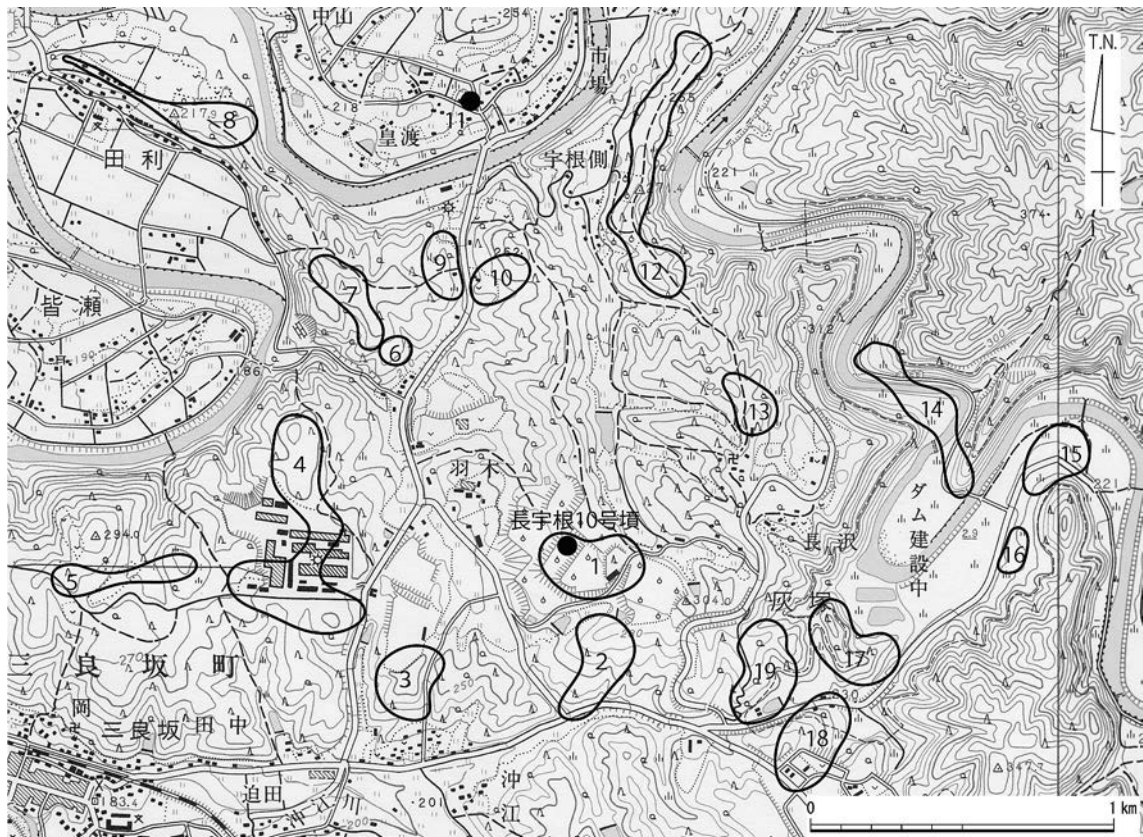


## 三次市三良坂町長宇根10号墳の測量調査

池西美咲・近藤直毅・佐々木尚也  
永野智朗・名村威彦・真木大空

### 1. はじめに

長宇根古墳群は広島県三次市三良坂町灰塚に所在する（第1図）。本古墳群の位置する上下川流域は古墳時代後期に古墳の築造が隆盛となるが、三次盆地において特徴的な帆立貝形古墳の築造は希薄な地域となっている。その中で長宇根10号墳はこれまで長宇根古墳群を構成する小型円墳の一つとされてきたが、現地調査の結果、帆立貝形古墳である可能性が浮上した。そのため、長宇根10号墳の墳形及び築造時期を明らかにし、当該地域における古墳造営への理解を深めるため、2015年3月下旬、広島大学文学部考古学専攻25年度生の実習授業（野外考古学実習C）として、測量調査を行った<sup>(1)</sup>。広島大学考古学研究室は、2013年と2015年に三良坂町の南に位置する吉舎町で帆立貝形古墳の測量を行っており、墳丘形態の変遷について考察している（村田ほか 2014、平尾ほか 2015）。本稿もその流れを汲むものとして、以下に調査経過と成果を報告する。（池西）



第1図 長宇根10号墳周辺遺跡分布図 (1/25,000)

1. 長宇根古墳群 2. 滝王山古墳群 3. 沖江白ヶ迫古墳群 4. 植松古墳群 5. 応丸古墳群  
6. 柳原南古墳群 7. 田利南古墳群 8. 田利北古墳群 9. 柳原北古墳群 10. 兔峠古墳群  
11. 皇渡古墳 12. 斗納山古墳群 13. 長沢古墳群 14. 田戸古墳群 15. 油免遺跡 16. 土森遺跡  
17. 寺山古墳群 18. 野竹古墳群・野竹遺跡 19. 横谷古墳群

## 2. 地理的・歴史的環境及び長宇根古墳群の概要

### (1) 地理的環境

三次盆地は過去の度重なる地殻変動によって形成された中国山地脊梁中央部の南側に位置し、その標高は150m～350mである(卯山 2004)。盆地東側では上下川、美波羅川、国兼川が馬洗川に注ぎこみ、盆地西側で馬洗川、可愛川、西城川が合流して中国山地最長の江の川本流となる。これらの河川の浸食作用によって平地が形成されるが、それぞれの平地は丘陵によって分断されている。

### (2) 歴史的環境

三次地域は全国的にも有数の古墳密集地域として知られ、約4,000基の古墳が築造されている(桑原 2004)。

三次盆地に古墳が出現するのは前期後半からで、岩脇古墳(潮見 1974)、若宮古墳(藤井ほか 2014)などが挙げられる。若宮古墳は墳長約36.5mの前方後円墳で、4世紀後半ごろの築造とされている(藤井ほか 2014)。

中期前半には川西古墳群(潮見 1974)や鞍ヶ谷北古墳群(田中 1979)など、直径20m未満の円墳数基で構成される古墳群がある。また、善法寺古墳群(潮見 1974)など墳長30m前後の帆立貝形古墳が見られ始める古墳群もある。中期中頃からは糸井大塚古墳(桑原 1986)や三玉大塚古墳(桑原ほか 1983)、酒屋高塚古墳(青山 1983)など、墳長40mを超える大型帆立貝形古墳が首長墳として築造される。一方で、直径20m未満の小型古墳で構成される上四拾貫古墳群(向田・鹿見 1978)や上定古墳群(桑原 2004)など、いわゆる初期群集墳が首長を支える有力農民の墓として築造される。

後期になると、勇免古墳群(潮見 1974)や久々原古墳群(潮見 1974)など墳長10～20mの小型の前方後円墳と円墳により構成される古墳群や、小型の円墳のみで構成される群集墳が多く築造される。帆立貝形古墳はこれまで確認されていなかったが、2015年の海田原29号墳の測量調査で後期まで下る例があることが明らかとなった(平尾ほか 2015)。また、埋葬施設は後期前半の若屋9号墳(松崎・潮見 1961)で横穴式石室が採用されるようになる。

以上のような三次盆地の古墳造営のあり方と対比されるのが、北東約15kmに位置する庄原盆地である。庄原盆地では、中期中頃から旧寺古墳(藤野 1983)や甲山古墳(田又・吉本 1980)など墳長50mを超える前方後円墳が築造され、後期に入っても唐櫃古墳(稲垣 2000)など墳長40m前後の前方後円墳が築造され続ける。同時期の三次盆地の古墳とは墳形や規模に明らかな差があり、両者の関係性は畿内や吉備地域の動向を含めて検討がなされてきたが(桑田 1991a、古瀬 1992・2006)、未だ意見が分かれている状況である。

長宇根古墳群が位置する三良坂地域は三次盆地の周縁部にあたり、三次盆地と庄原盆地のちょうど中間点に位置する。この地域では中期末に2基の前方後円墳(1基は帆立貝形古墳か)を含む植松古墳群(辻 1987)が長宇根古墳群の北西約1kmの地点に築造され、後期に入ると天神22号墳(桑田 1991b)など墳長20mほどの前方後円墳が築造される。また、上下川を含む江の川流域の後期横穴式石室墳には、坏身・坏蓋など完形の須恵器もしくは甕・

横瓶などの破片を石室内床面に敷き詰める須恵器敷床が採用される例が複数あり、この地域の特徴を示している（後藤・藤村 1998）。

三次盆地と庄原盆地の関係性を理解することは、古墳時代における一地方のあり方を明らかにすることにつながるため非常に重要な課題である。両盆地の中間点に位置する三良坂地域での調査を今後も続けていき、さらに検討を進める必要がある。（真木）

### （3）長宇根古墳群の概要

長宇根古墳群は10基の古墳によって構成され、長宇根 8 号墳が墳長17mの前方後円墳である以外は径15m以下の円墳<sup>(2)</sup>とされている（広島県教育委員会 2002）。本古墳群は三次盆地東部を蛇行しながら北流する上下川の西岸約 1 km の丘陵上に分布しており、現在は古墳群の位置する丘陵全体がみらさかピオーネ生産組合のぶどう畑として利用されている。長宇根古墳群は発掘調査及び測量調査が行われておらず、8号墳は現在前方部が削平により消滅している。

長宇根10号墳の周囲はぶどう畑を造成する際に階段状に地形が改変されているが、本古墳はその造成からは浮島状に切り残されている。大きく改変を受けた現在の地形からは元の地形を知ることは難しいが、『広島県遺跡地図Ⅷ』（広島県教育委員会 2002）にぶどう畑造成以前の地形図が掲載されている。35,000分の1という縮尺で掲載されているため、詳細な地形は把握できないが、ぶどう畑造成以前の地形をおおまかに復元することができる。それによると、西へ舌状に張り出した2本の尾根によって形成された谷の中ほど、北東から南西にかけて約11°傾斜した斜面に本古墳は築かれている。

長宇根10号墳は測量調査時には墳丘北側に堆肥腐葉土の仮置きや墳丘南東部にマサ土のような細礫を含む盛り土が見られ、農業用資材の仮置き場として利用されているようである。

（佐々木）

## 3. 調査方法と日程

### （1）調査方法

測量図の作成は閉合トラバースを用いた平板測量によって行った。トラバースを設定する際には TOPCON 社製のトランシット CS-101F を使用した。また、直接水準測量及び平板測量の際には TOPCON 社製のオートレベル AT-G1、SOKKIA 社製の C3<sub>10</sub> を使用した。

**トラバースの設定** 閉合トラバースの設定にあたり、円丘部<sup>(3)</sup>頂の永久杭（P.1）を含めて計7本の杭を設置し（第2図）、各測点の測距と測角を行った。方位角の測角には SUUNTO 社製の方位磁石 KB-14/360R をトランシットに取り付け、P.1の方位角を測角した。P.1の方位角は3回の測定値の平均値を算出し、計算間違いの起きる可能性を減らすため、最も近い5の倍数となるように調整した。

**水準測量** 標高の設定は直接水準測量によって行った。既知点として国土地理院が設置した四等三角点（基準点コード TR45232172801、「K地（7）長沢」（平成11年8月1日）、北緯 34° 46′ 12″ .1162、東経132° 59′ 02″ .0601、X座標 -136144.133、Y座標 74805.781、標高

303.84m) を使用した。既知点から P.1 への往復路線で標高を求める予定であったが、トラバース設定の作業で P.1 を使用していたため、P.6 への往復路線で標高を求めた。往路でレベル差  $-37.515\text{m}$ 、復路でレベル差  $+37.552\text{m}$  を記録し、誤差  $3.7\text{cm}$  となった。約  $880\text{m}$  という移動距離とレベル差約  $37\text{m}$  という値を考慮し  $\pm 5\text{cm}$  を許容誤差とした。レベル差の平均値  $37.5335\text{m}$  を採用し、P.6 の標高を四捨五入した  $266.307\text{m}$  に決定した。

**トラバース計算** 現地での測定値をもとに計算したところ、 $2' 10''$  と大きな誤差

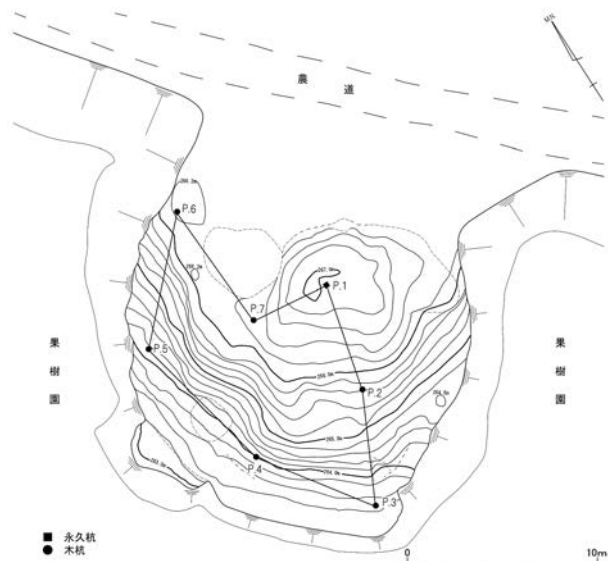
が算出されたため、各側線の内角を再測角した。その結果、P.1 と P.7 においてそれぞれ  $-40''$  の差が出たため値を修正し、誤差が  $50''$  となった。各内角において誤差  $\pm 10''$  を許容誤差と考え、全体として  $\pm 1' 10''$  を許容誤差とした。算出された誤差については杭の本数 7 で整数値になるように等分し、最も内角の大きい P.7 を  $-8''$ 、P.1~6 を  $-7''$  として補正した。経距は誤差がなく、緯距の誤差  $-2\text{cm}$  であったため、絶対値が最大の側線 (P.4-P.5) とそれに次ぐ絶対値の側線 (P.6-P.7) に緯距の誤差配分をした。

**紙割り** 上記の誤差配分の結果算出した各杭の座標を方眼紙上に  $100$  分の  $1$  の縮尺で記録した。測量は北半と南半で 2 班に分かれて行うため、P.1、P.7、P.5 を共有させて、2 枚のマイラーシートに分割して杭の位置を写し取った。

**平板測量** 測量は 2 台の平板を用いて行い、等高線間隔  $20\text{cm}$ 、縮尺  $100$  分の  $1$  の平板測量図を作成した。測量点の計測については縮尺の大きさを考慮し、測量領域全体に渡り  $\pm 5\text{mm}$  を許容範囲とした。

## (2) 調査日程

本調査に先立ち、平成 28 年 1 月 23 日と同年 3 月 4 日に現地調査を行った。一度目の現地調査では墳丘の現状や周囲の地形を確認した。この際、墳丘南半で数点の須恵器片を発見した。二度目の現地調査では墳丘の形状を確認し、土地所有者である三上隆己氏に墳丘に関するお話を伺った。本調査は平成 28 年 3 月 24 日から 29 日までの計 6 日間実施した。24 日に先述した四等三角点から P.6 まで水準測量を行う水準測量班と、トラバースの設定を行うトラバース班に分かれ、トラバース班は杭の設置、各杭間の測距、P.1~3 までの測角を行い、水準測量班は往路の途中まで水準測量を行った。水準測量に関しては 24 日のみで往路を達成することができなかつたため作業終了時に地点を記録し、25 日に続けて行うこととなった。25 日の午前にトラバース班は全測点の測角を終え、水準測量班は往路を完了した。計算の結果、トラバースが閉合しなかつたため、午後、トラバース班は各測点の再測角を行うと同時に各杭間



第 2 図 測量杭配置図 (1/400)

のレベル差を測定し、水準測量班は水準測量の結果を確認するための復路を開始した。25日、トラバース班は再測角と修正をし、残りの杭間のレベル差を測定した。各点のレベル差に許容範囲を超える誤差はなかった。水準測量班は復路の途中で作業を終了し、24日と同様に地点を記録した。大学に帰着後、紙割りを行い、紙割り図等を作成した。26日の午前にトラバース班は遺物の表採と墳丘南半の測量を開始した。水準測量班は復路を完了させた。午後からは墳丘の北半と南半に分かれて測量を行った。27日から29日にかけては墳丘測量・周辺地形測量・遺物表採・写真撮影を併行して行った。測量図作成にあたり、北半測量班と南半測量班がそれぞれマイラーシートの端から中央にむけて測量図を作成したため両班の図面に許容範囲を超える誤差が現れたが、両班で検討し修正した。29日の午後は墳丘の東西の崖面の一部を清掃して崖面を露出させ、地山上面の標高を東側で10点、西側で2点測高した。29日に測量が終了したため、両班の測量図の整合性を確認し、墳丘形状を検討した。その後、永久杭1本(P.1)と木杭2本(P.3、P.5)を残して撤収した。(名村)

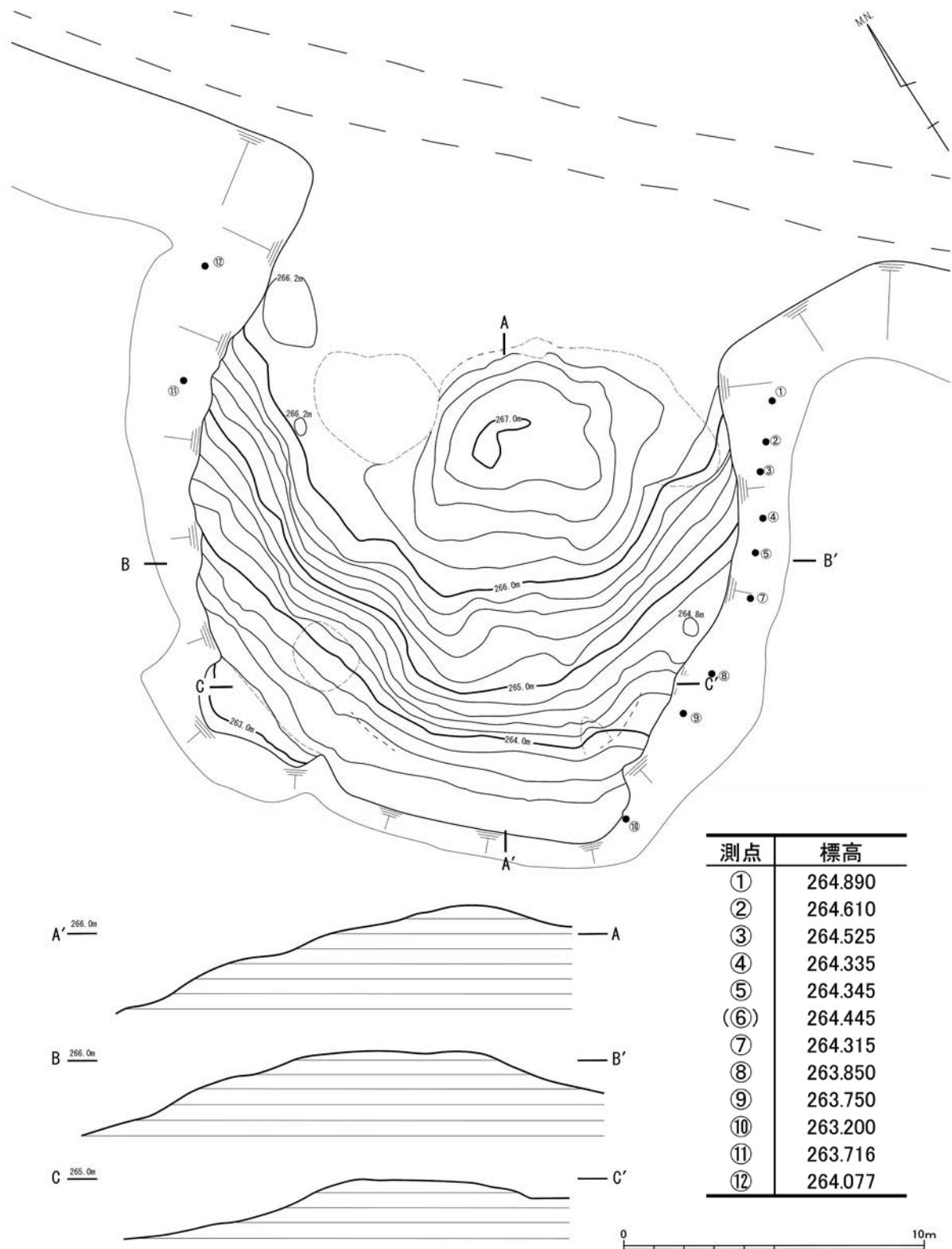
#### 4. 考 察

##### (1) 墳丘復元

長字根10号墳は後世における改変が著しく、単純に等高線から墳丘形態を復元するのが困難な状況となっている(第3図)。そのため、現地での観察により築造時の墳丘面が遺存していると判断した範囲や、墳丘周囲の崖面にみられる地山の傾斜をもとに墳丘復元を試みることにする。(池西)

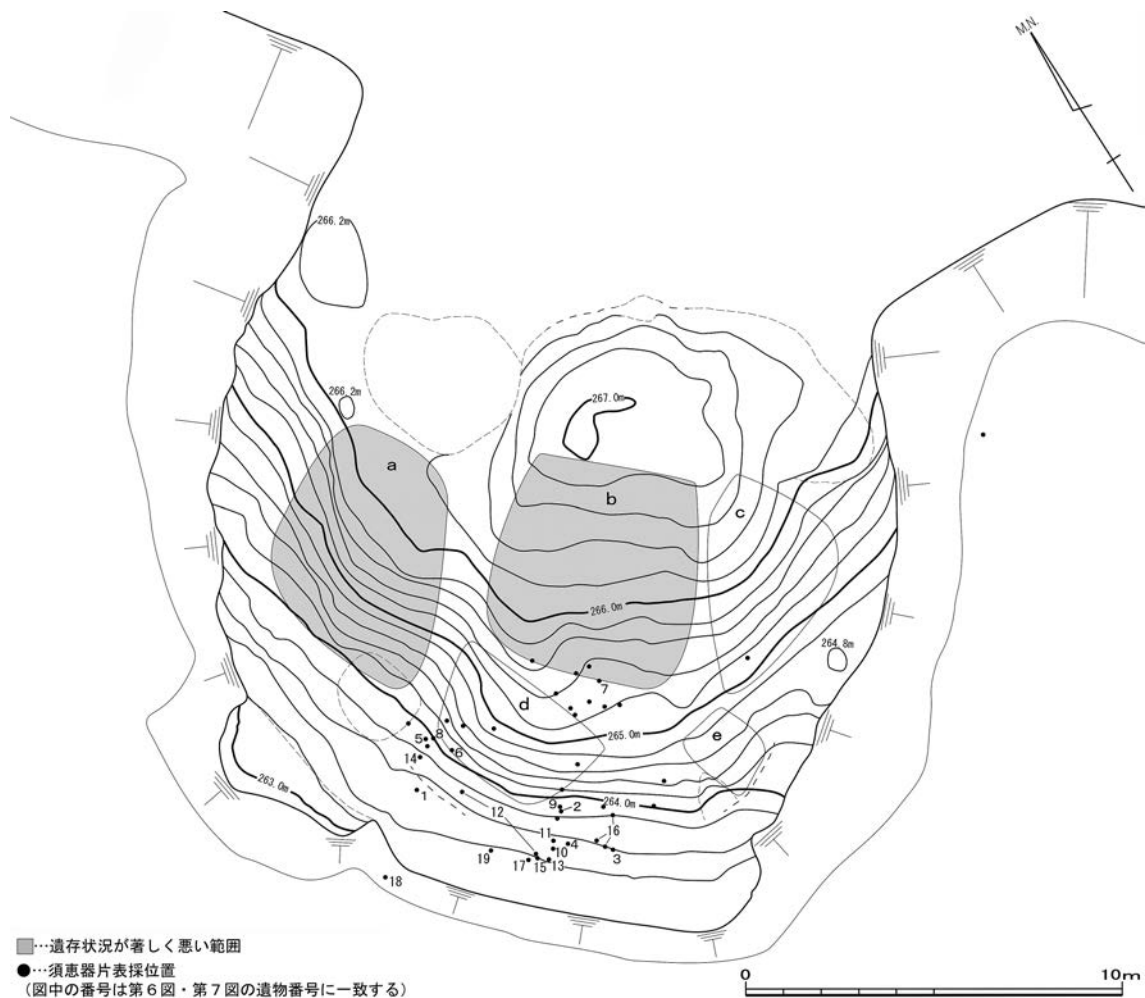
はじめに、地山の傾斜を求めるために崖面を観察し、地山上面の標高を測高した。東側は比較的崖面が露出しており、10ヵ所<sup>(4)</sup> 標高を測ることができたが、西側は草が生い茂っていたため、崖面が少し露出している2ヵ所での測定となった。計12点の測点を東から時計回りに測定した(第3図)。東側は測点①と⑩のレベル差が1.69m、傾斜は6° 38′、西側は測点⑩と⑫のレベル差が0.361m、傾斜5° 25′となり、北から南へ傾斜している。また、測点①と⑫、④と⑩が墳丘主軸にほぼ直交すると考えられるためその2点のレベル差と傾斜を出した。測点①と⑫はレベル差0.813m、傾斜2° 24′、測点④と⑩はレベル差0.619m、傾斜1° 47′となっている。これらの結果から地山全体が北東から南西方向に傾斜していることが分かり、先述した旧地形の復元と整合性が取れている。(近藤)

次に、墳丘各部の遺存状況であるが、円丘部は北半部分が農道と高さを合わせるように造成されており、現状での最高所から約0.8mを残して全て埋没しているため、墳裾を窺うことはできない。また、現在遺存している部分も現状での傾斜変換点は明瞭であるが、北東斜面は造成後に墳頂部分が掘り返された際のものと思われる拳大の礫が混じった排土に、北西から北側斜面は堆肥腐葉土に覆われているため(図版第2a)、どの程度円丘部本来の傾斜が保たれているか不明である。西側斜面(第4図a)に関しても、一見円丘部本来の形状を残しているようであるが、草性植物の生育度合いの差がクロップマークとして現れているため、墳丘を形成しているものとは異なる土に覆われていることが想定される(図版第1b)。さ



第3図 長宇根10号墳墳丘測量図 (1/200)

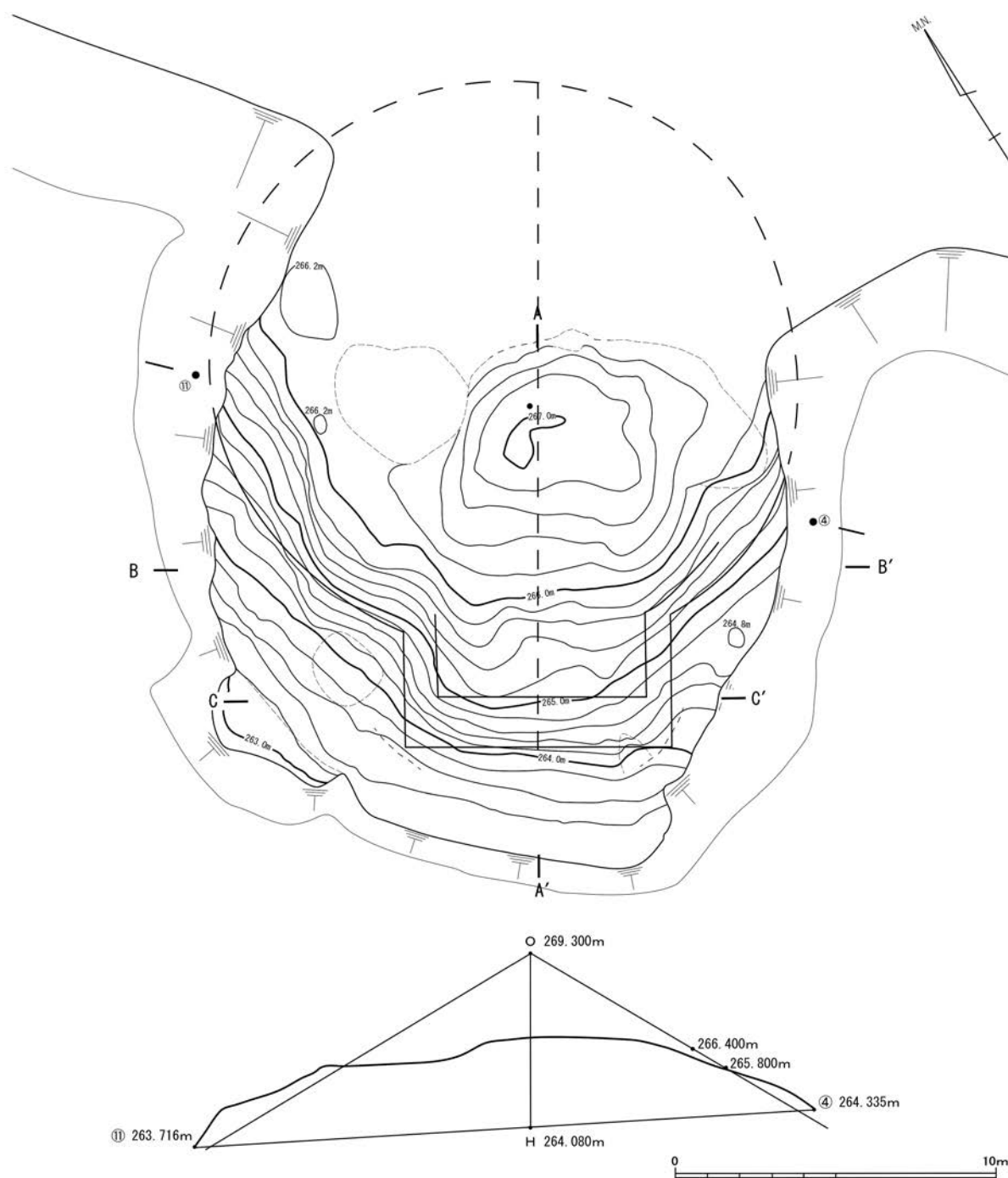
らに、南西斜面（第4図b）は墳頂部分が掘り返された後に再び埋め戻されたと想定され、北東斜面同様に拳大の礫が散乱している範囲が確認できる（図版第3b）。



第4図 長宇根10号墳墳丘遺存状況図 (1/200)

しかし、南側斜面の標高265.0~266.6mの部分(第4図c)は、ほぼ等間隔に等高線が巡っており、上記のような改変の痕跡も認められないため、築造当時の墳丘面を良好に保っていると考えられる。よって、墳丘形態を復元するにはこの南側斜面の等高線(265.8m)からまず円丘部の中心Oを求めた(第5図下)。次に、同斜面の標高265.8~266.4m間の傾斜が $31^\circ$ であったため、この角度を円丘部の傾斜とし、東西方向(④と⑩)<sup>(5)</sup>を結んだ地山面まで延長させて交差した点を墳裾に設定した。そして、Oから鉛直方向に伸ばした直線と東西方向(④と⑩)を結んだ地山面との交点を点Hとし、墳裾から直線O-Hまでの距離を半径として復元を行った。第5図下の太線は④-⑩間の墳丘断面、細線は南側斜面から求めた円丘部の傾斜を表している。墳丘の断面と円丘部の傾斜が大きく異なるところは、先に述べた盛り土や削平等の改変を受けているとした箇所と概ね合致する。なお、地山は東西方向に約 $2^\circ$ 傾斜しており、円丘部の東西で半径の値が若干異なっているため、正円ではなく西側にやや広がった楕円形として復元している。

方丘部は測量時の観察や墳頂部が掘り返された際に散乱したと思われる須恵器片の集中的な分布状況から、造成の際あるいはそれ以降において円丘部ほど大きな改変は受けてい



第5図 墳丘復元図 (1/200)

ないと考えられるため、現状の等高線や傾斜変換点（第4図d・e）から復元を行った。なお、方丘部の標高265.4～265.0mあたりにテラス面が存在した可能性があるが、円丘部南側斜面の等高線間隔に同様の広がり認められないため、円丘部二段目に関して言及することはできなかった。  
(池西)

(2) 長宇根10号墳の墳丘形態と規模

**円丘部** 円丘部は南側の一部が破壊されている。墳丘の築成については、検討できていない。



墳裾は先述の通り、造成土で覆われているため、等高線の状況からは分からない。また、周溝や葺石についても確認できていないが、埋葬施設に関しては後述するように須恵器敷床を備えた横穴式石室であったと推定される。

**方丘部** 方丘部は標高265.4～265.0m間の間隔が少し広く、テラス面を形成しているように見える。265.0～263.8m間の傾斜が急になっており、264.0mあたりが墳裾になると考えられる。段築や葺石などは確認できなかった。方丘部の南から東側に遺物が集中している。

**墳丘規模** 長宇根10号墳の墳丘規模は、墳長約19.7m、円丘部は推定長径約17.6m、短径約16.8m、高さは4m程度、方丘部は長さ約3.2m、幅約8.4m、高さ約1mと考えられる（第5図）。現状の円丘部頂最高点の標高は267.04mである。墳丘主軸は北東－南西である。平面形は帆立貝形を呈しており、方丘部長／円丘部径＝1/5、方丘部幅／円丘部径＝1/2、方丘部高／円丘部高＝1/4である。

### （3）遺物

長宇根10号墳の調査時、方丘部上から墳裾にかけて42点、墳丘外東側崖面から1点、墳丘外南側崖面から1点、計44点の須恵器片を表採した（内2点接合した資料が2つ、3点接合した資料が1つ）。いずれも細片であるが、蓋坏、高坏、提瓶、甕など豊富な器種が見られる。ここでは遺存状態の良い19点について報告する（第6図、第7図）。

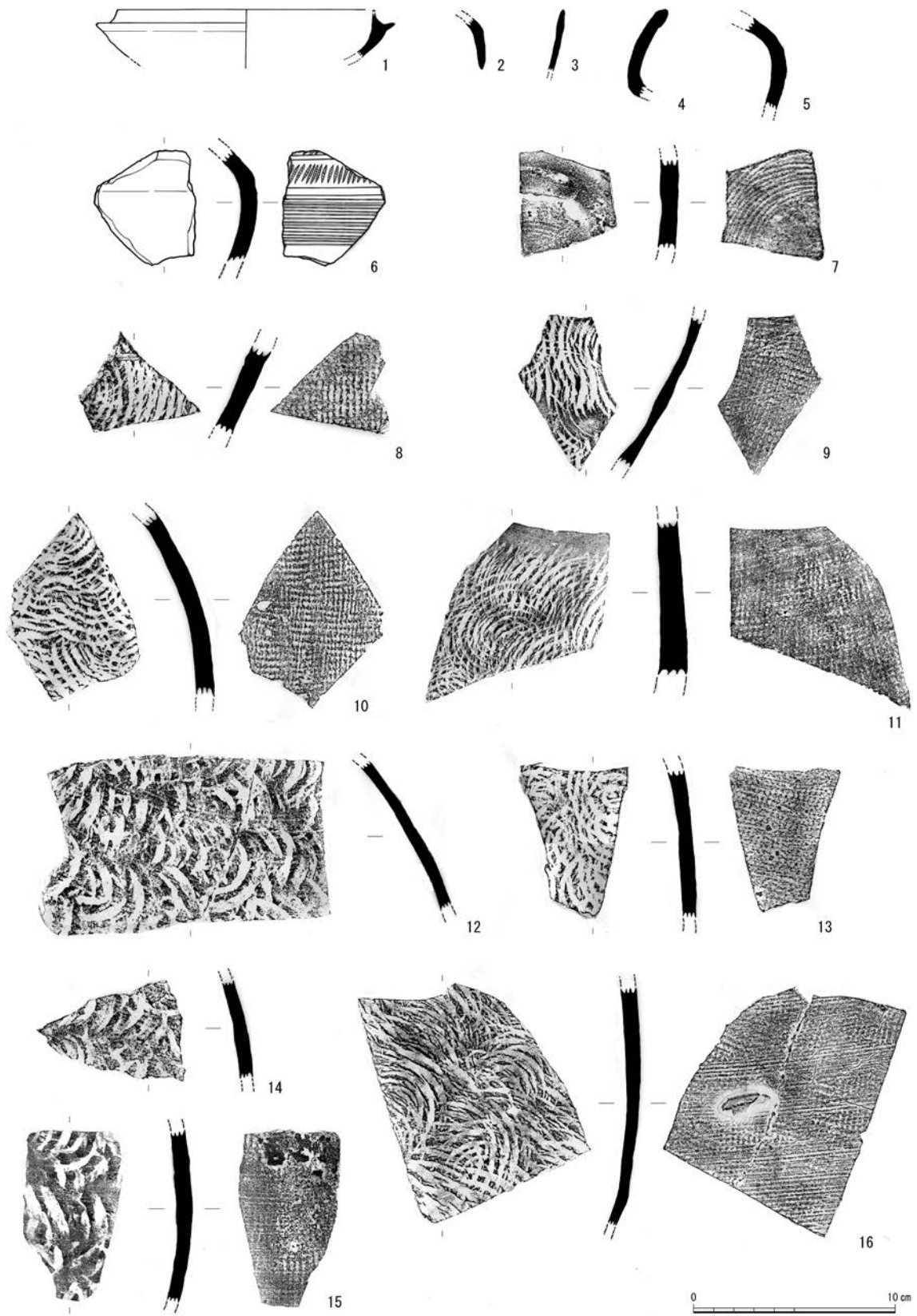
**蓋坏** 1は坏身の破片で、口縁部から受部にかけて残存しており、復元口径12.6cm、残存高2.5cmである。口縁部はやや内傾して上方にたちあがる。受部は外上方に短くのびており、端部は丸い。内外面に横ナデが施されている。2は坏蓋の口縁部片で、残存高2.5cm、厚さ0.6cmである。肩部がわずかに屈曲し、口縁部に段は認められない。内外面ともに横ナデの調整が施されている。

**高坏** 3は無蓋高坏の口縁部片で、残存高2.9cm、厚さ0.3cmである。上方にたちあがり、端部は丸い。内外面ともに横ハケが施されている。

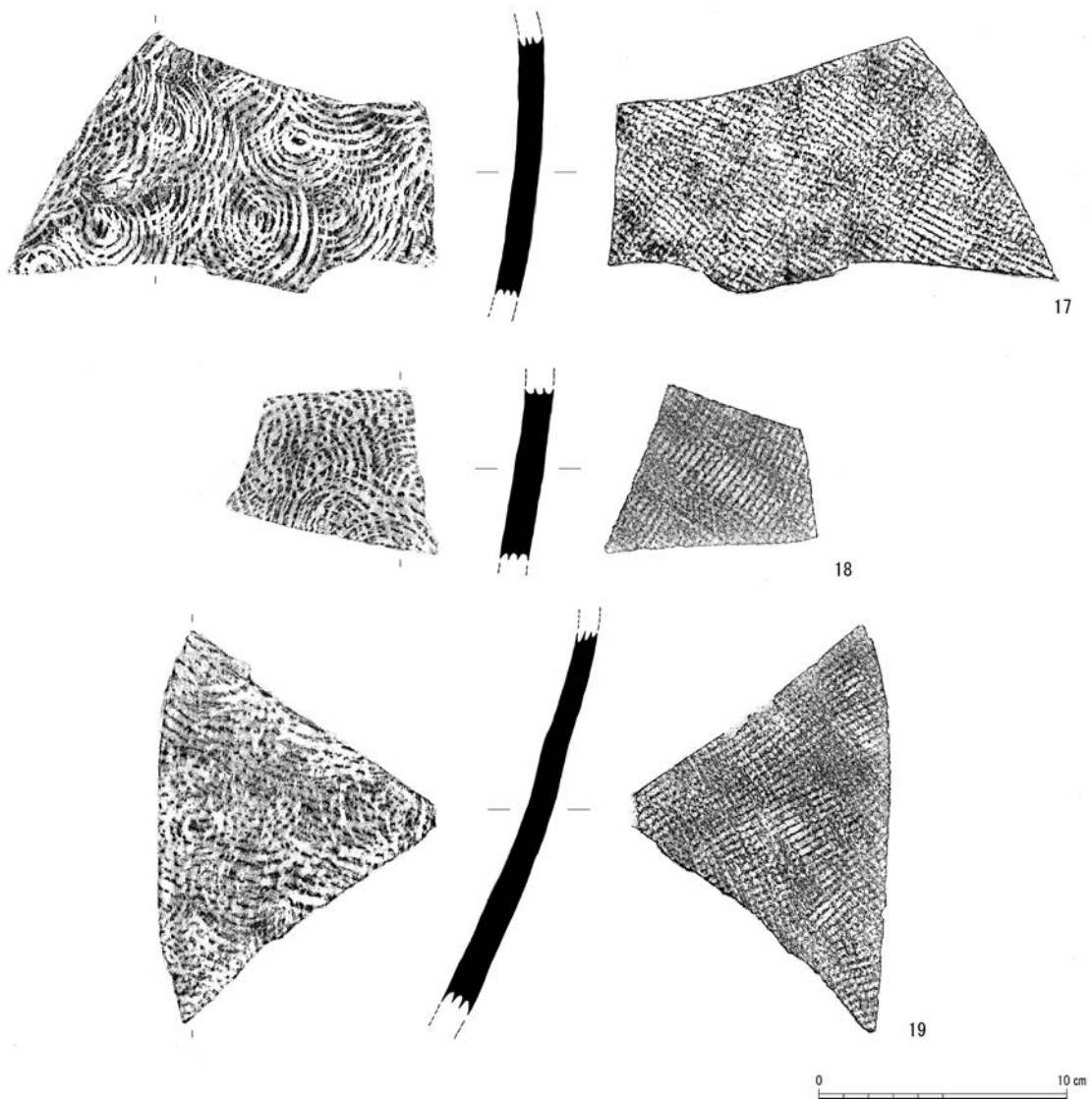
**提瓶** 4は提瓶の口縁部片で、残存高4.4cm、厚さ0.8cmである。口唇部がやや厚くなり、肩の部分で大きく外に広がる。内面の頸部屈曲部にハケ調整、内外面にナデ調整が施されている。なお、2～4は細片のため、口径の復元はできていない。7は提瓶の胴部片で、残存高5.4cm、厚さ0.9cmである。内面は円を描くようにナデ調整が見られる。外面は円を描くようなカキメが見られ、提瓶胴部中心付近をめぐるカキメと、やや間隔を開けてめぐるカキメの二重文様になっている。

**甕** 5・6ともに甕の体部片である。5は甕の肩部で、残存高4.75cm、厚さ0.8cmである。内面には横ナデ調整が見られる。外面にもナデ調整が施されているが、摩耗により明瞭ではない。6は甕の肩部から胴部にかけて残存している。残存高5.5cm、厚さ0.8cmである。内面は全面に横ナデが施される。外面肩部には凹線がめぐらされ、その間に単位8本の櫛状工具による刺突文が見られる。胴部には単位8本の横位の櫛描文が見られる。

8～19は甕片で、12と17は2点接合、16は3点接合の資料である。8は胴部下半の破片で、残存高4.7cm、厚さ1.0cmである。内面に青海波文と細かいハケ、外面には浅い格子叩目



第6図 表採土器 (1/3)



第7図 表採土器 (1/3)

文が見られる。9は胴部下半の破片で、残存高7.9cm、厚さ0.7cmである。内面には細かな青海波文が見られる。外面には浅い格子叩目文が見られ、その上位に横ハケが施されている。10は胴部上半の破片で、残存高9.5cm、厚さ0.9cmである。内面に青海波文、外面には格子叩目文が見られる。11は胴部中ほどの破片で、残存高7.8cm、厚さ1.0~1.4cmと下部が厚くなる。内面には青海波文とナデが見られ、外面には浅い格子叩目文と内面と同じ位置にナデが見られる。12は肩部片で、残存高14.5cm、厚さ0.7cmである。内面は青海波文が見られるが、粗いナデ調整が施されておりやや不明瞭である。外面は風化が激しく調整は判断できないが、自然釉が見られる。13は胴部上半の破片で、残存高7.3cm、厚さ0.8cmで、内面には青海波文が見られる。外面には浅い格子叩目文が見られ、その上位に横ハケが施される。また一部に自然釉が付着している。14は胴部上半の破片で、残存高5.0cm、厚さ0.7cmである。内面に青海波文と横ナデが施されている。外面には自然釉が見られる。15は胴部中ほどの破片で、残存高8.4cm、厚さ0.8cmである。内面は青海波文が見られ、外面は自然釉、それより下位

には横ナデが見られる。16は胴部中ほどの破片で、残存高11.7cm、厚さ0.8cmである。内面には青海波文が見られる。外面には格子叩目文が見られ、その上位に横ハケが施されている。また、外面には他の土器の口縁部片が付着している。17は胴部中ほどの破片で、残存高16.1cm、厚さ1.0cmである。内面は明瞭な青海波文が見られ、わずかにナデ調整が見られる。外面には格子叩目文が見られる。18は胴部下半の破片で、残存高7.8cm、厚さ1.1cmである。内面には青海波文が見られる。外面には格子叩目文が見られる。19は胴部下半の破片で、残存高16.3cm、厚さ1.25cmである。内面に青海波文、外面には格子叩目文が見られ、部分的に自然釉が付着している。(近藤)

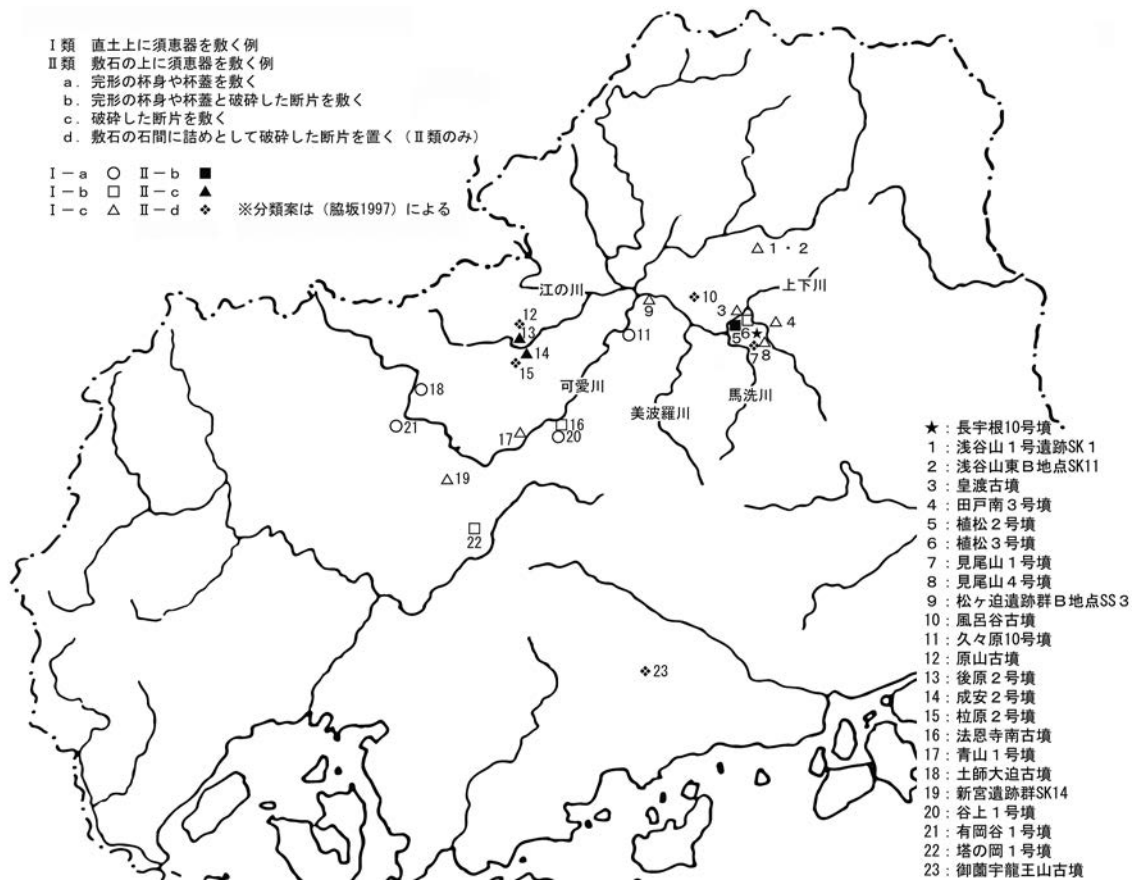
#### (4) 築造時期

今回の調査では多数の須恵器片を表採することができたため、長宇根10号墳の築造時期を特定することが可能となった。ほとんどの須恵器片は方丘部から墳裾にかけて表採されたが、これは円丘部が掘り返され、その排土が再び埋め戻された際に方丘部上に遺存したものと思われる。10号墳は長宇根古墳群のなかでもやや独立した場所に位置していることから、これらの須恵器片は10号墳の時期を示す蓋然性が高い。いずれも細片であるが、これらはMT85型式からTK217型式古段階の特徴をもつと思われる。6世紀第3四半期から7世紀第1四半期までの幅広い期間を示しており、6世紀後半に築造された後に追葬が行われた可能性がある。

#### (5) 埋葬施設

表採された須恵器片と周囲の古墳との比較から埋葬施設の復元を行う。長宇根古墳群の所在する上下川流域では6世紀後半以降、箱形石棺と横穴式石室の両者が用いられるが、横穴式石室の場合は床面に須恵器を敷き詰める、いわゆる須恵器敷床が設けられることが多い(第8図)。須恵器敷床は脇坂光彦氏によって分類されており(脇坂1997)、上下川流域の他に江の川支流や山陰地方にも多く分布している。上下川流域の須恵器敷床は脇坂氏の分類ではI-B、I-C、II-B、II-D類にあたり、甕などの体部片を敷くことが多い。

長宇根10号墳では埋め戻された土や墳丘北東側に盛られた土に拳大から人頭大の礫が混じっていたが、それらの礫には横穴式石室の側壁や天井石に用いられるような大きさのものは見られなかった。そこで、これらの礫は縦穴式石槨や横穴式石室の裏込め石に用いられたものと考えた。しかし、表採された須恵器片の年代とその時期幅の広さから追葬が考えられることを踏まえると、10号墳の埋葬施設は縦穴式石槨ではなく横穴式石室であったと想定できる。また、本古墳では蓋坏の口縁部片とともに3個体分の甕の体部片、甗、提瓶の体部片、口縁部片が表採されており、皇渡古墳(佐伯1987)や見尾山1号墳(大上ほか1994)出土須恵器と器種組成・年代の両者で類似している。これらのことから長宇根10号墳も横穴式石室に須恵器敷床が用いられていた可能性がある。ただ、上下川流域で須恵器敷床を持つ古墳は全て小型円墳であり、墳長20mの帆立貝形古墳である長宇根10号墳にもあてはまるかどうかの確証はなく、単に礫敷の可能性も否定できない。この点に関してはさらなる資料の増加を待たねばならない。(永野)



第8図 広島県における須恵器敷床分布図

(6) 長宇根10号墳の位置づけ

長宇根古墳群は1基の前方後円墳（現在前方部消滅）、1基の帆立貝形古墳と8基の小型円墳から構成されることが判明したが、10号墳以外は調査が行われていないため、古墳群としての性格は検討できない。また、上下川流域において、同時期・同規模の帆立貝形古墳の調査例が無く、長宇根10号墳自体も墳丘の全体像を復元するには至っていないため、型式学的検討を行うのも困難な状況である。流域が異なるものの、平尾英希氏が馬洗川上流域の帆立貝形古墳について時期が下るに従って方丘部が拡大化する傾向を指摘している（平尾ほか2015）。本古墳は墳長19.7mとやや小型であるため単純に比較することはできず、また数値の上でも長さ・幅ともに拡大化傾向を示してはいない。しかし、中期段階のものと比べて、後期の帆立貝形古墳は円丘部径に対する方丘部幅の割合が大きいという傾向を肯定することはできよう。

三次地域では、中期において盆地中央部で大型の帆立貝形古墳をはじめとした古墳築造が増加し、後期になると盆地周縁域へ広がっていく（古瀬1992）。古墳群を形成する墳形も小型の前方後円墳と円墳に変化していく中、6世紀末に至っても小型ではあるが帆立貝形という墳形が採用されていることは注目できる。これまで小型の円墳とされてきたもののなかに帆立貝形古墳が含まれている可能性は大いにあり、類例が増加していくと、帆立貝形古墳の

中での階層性や被葬者についても新たな視点を得ることができるかもしれない。

## 5. 三次市粟屋町粟屋高塚古墳の現地調査報告（図版第6）

粟屋高塚古墳は広島県三次市粟屋町峠に所在する。直径約18mの円墳とされており、出雲との関連を示す横穴式石室を有する後期古墳である。しかし、墳丘の南方向に方丘状の高まりがみられることも指摘されており、帆立貝形古墳である可能性も考えられるため、測量実習の一環として実地観察を行った。

その結果、墳丘南西方向に長さ約8m、幅約7.5mの高まりを確認することができた。南側は比較的良好に遺存しており、くびれ部もみられた。一方で、北側は周辺地形から緩やかに続いており、明瞭に傾斜変換点を確認するのはやや困難な状況であった。ただし、円丘部の東から続く周溝が西側で途切れていることから、この高まりが方丘部である可能性は高いと考える。現状では、円墳であると断定することはできず、帆立貝形古墳であるとも考えられるため、今後測量調査によって詳細な測量図を作成する必要がある。本古墳は、盆地周辺部という立地や時期・墳丘規模において長宇根10号墳と類似しており、三次地域における後期帆立貝形古墳の様相を把握するための一資料となるかもしれない。

## 6. おわりに

今回の測量調査によって、長宇根10号墳の詳細な墳丘測量図を作成することができた。その結果、10号墳は墳長約19.7m、円丘部長径約17.6m、短径約16.8m、円丘部高推定4m程度、方丘部長約3.2m、方丘部幅約8.4m、方丘部高約1mの帆立貝形古墳と考えられる。また、表採した須恵器片の器種組成や時期から、上下川流域や江の川支流・山陰地方に分布する須恵器敷床が本古墳においても用いられた可能性を指摘するとともに、帆立貝形古墳の築造が6世紀後半段階まで下ることが明らかとなった。（池西）

長宇根10号墳の測量調査を行うにあたって、三次市教育委員会の友廣美和氏には調査の準備等でお世話になりました。また、三上隆己氏をはじめ、みらさかピオーネ生産組合の皆様には敷地内への立ち入り及び施設の使用を快諾していただき、非常に良い環境の中で調査を行うことができました。また、野島永教授には現地までのご引率から調査のご指導、その後の本稿の執筆に至るまで多くのご教示を賜りました。また、ウェルナー・シュタインハウス特任准教授にも英文サマリーの添削等、ご指導いただきました。記して感謝いたします。

## 註

- (1) 測量調査は、野島永教授の指導のもと、池西美咲（学部4年生）が全体の計画を統括し、近藤直毅・佐々木尚也・永野智朗・名村威彦・真木大空（学部3年生）が測量を行った。本稿の作成にあたっては、それぞれが分担執筆し、池西が編集を行った。
- (2) 8、10号墳以外の8基の円墳に関しても生産組合敷地内にあるものと思われるが、確認することはでき

ていない。

- (3) 墳丘各部の名称は、一昨年と昨年の研究報告（村田ほか2014、平尾ほか2015）を踏襲し、「円丘部」「方丘部」の語を用いる。
- (4) 測点⑥については測定地点が不明なため図示していない。
- (5) 地山レベルの点については、円丘部の遺存状態の良い箇所を通っていること、北東から南西への地形傾斜を反映していること、円丘部の径に近い長さがとれることの3点を満たすものとして④と⑩を採用している。

## 引用・参考文献

- 青山 透編 1983 『酒屋高塚古墳』広島県教育委員会。
- 栗津清蔵・包 国勝・茶畑洋介・平田健一・小松博英 2010 『絵解き測量』オーム社。
- 稲垣寿彦 2000 『広島県史跡 唐櫃古墳』広島県庄原市教育委員会。
- 梅本健治 1984 『岡田山第3号墳発掘調査報告—農林業同和対策事業（岡田林道新設工事）に伴う—』（財）広島県埋蔵文化財調査センター。
- 卯山善章 2004 「三次盆地の成り立ち」『三次市史』Ⅰ、自然環境編、三次市、2～11頁。
- 大上裕士・阿賀岡希子・脇坂光彦 1994 「見尾山古墳群」『灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅰ、広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第127集、財団法人広島県埋蔵文化財調査センター、55～127頁。
- 桑田俊明 1991a 「地域の概要 備後」『前方後円墳集成』中国・四国編、山川出版社、82～88頁。
- 桑田俊明 1991b 「天神22号墳」『前方後円墳集成』中国・四国編、山川出版社、345頁。
- 桑原隆博・嶋田 滋・伊藤 実・田邊 俊 1983 『三玉大塚—調査と整備—』広島県埋蔵文化財調査センター。
- 桑原隆博 1986 「三次地域における古墳の様相（1）—糸井大塚古墳—」『芸備』第16集、芸備友の会、27～32頁。
- 桑原隆博 2004 「古墳時代」『三次市史』Ⅰ、原始・古代編、三次市、206～268頁。
- 桑原隆博 2006 「三次地域の帆立貝形（式）古墳」『芸備』第33集、芸備友の会、38～55頁。
- 後藤陽一・藤村耕市 1998 「広島県灰塚ダム周辺の歴史民俗—総論・歴史環境—」『灰塚ダムとその周辺の生活』灰塚ダム学術調査団・生活部門調査委員会、13～15頁。
- 近藤義郎編 1991 『前方後円墳集成』中国・四国編、山川出版社。
- 佐伯博司 1987 『皇渡古墳発掘調査報告書』広島県埋蔵文化財調査センター。
- 潮見 浩監修 1974 『広島県双三郡・三次市史料総覧』第五篇、広島県双三郡・三次市史料総覧刊行会。
- 田中 昭 1979 「鞍ヶ谷北古墳群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(2)、広島県教育委員会、175～196頁。
- 田又仁美・吉本由紀 1980 「庄原市甲山古墳測量実習、無事?! 終了」『続トレンチ』第4巻1号、続トレンチ編集委員会、29～34頁。
- 辻 満久編 1987 『植松遺跡群』広島県埋蔵文化財調査センター。
- 長谷川昌弘・川端良和編 2004 『基礎測量学』株式会社電気書院。
- 平尾英希・池西美咲・貝原賢哉・香坂 亮・平本直幹・福地祥平・福元隆希・向井涼平・渡邊直宝 2015 「三次市吉舎町海田原29号墳の測量調査」『広島大学大学院文学研究科考古学研究室紀要』第7号、広島大学大学院文学研究科考古学研究室、93～108頁。
- 広島県教育委員会 2002 『広島県遺跡地図』Ⅷ、広島県教育委員会。
- 藤井翔平・市川伯博・森本直人 2014 「県史跡 若宮古墳の測量調査」『広島大学大学院文学研究科考古学

- 研究室紀要』第6号、広島大学大学院文学研究科考古学研究室、87～102頁。
- 藤野次史 1983 『旧寺古墳群測量報告』広島大学文学部考古学研究室。
- 古瀬清秀 1992 「古墳時代における備後北部の特質—特に三次盆地を中心に—」『吉備の考古学的研究』(下)、山陽新聞社、183～206頁。
- 古瀬清秀 2006 「三次地域の前半期古墳」『芸備』第33集、芸備友の会、22～28頁。
- 松崎寿和・潮見 浩 1961 「先史時代の広島地方」『新修広島市史』第一巻、広島市役所、114～224頁。
- 松村昌彦・佐々木和美 1989 『上大縄古墳・下の割遺跡』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第78集、広島県埋蔵文化財センター。
- 向田裕始・鹿見啓太郎 1978 「上四拾貫古墳群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(1)、広島県教育委員会、259～303頁。
- 村田 晋・赤木智香・上利碧月・川添敦史・戸川貴大・中田南美・林 美和・三輪剛史・山本晃弘 2014 「三次市吉舎町海田原20号墳の測量調査」『広島大学大学院文学研究科考古学研究室紀要』第6号、広島大学大学院文学研究科考古学研究室、103～115頁。
- 脇坂光彦 1997 「御菌宇龍王山古墳の発掘調査」『芸備』第26集、芸備友の会、120～148頁。

## Topographic Survey of the Naga-une Mounded Tomb No. 10 in Mirasaka, Miyoshi City

Misaki IKENISHI, Naoki KONDO, Naoya SASAKI,  
Tomoro NAGANO, Takehiko NAMURA, Hirotaka MAKI

The Naga-une mounded tomb No.10 is supposed to be a round or scallop shell-shaped mounded tomb located in Mirasaka-chō, Miyoshi City, Hiroshima Prefecture. As part of “Field Practice in Archaeology C” for the twenty-fifth annual class of archaeology majors at the Hiroshima University School of Letters, we conducted a topographic survey of this mound with the aim of clarifying its scale, shape and the date of its construction. This mounded tomb has been altered by land reclamation for a vineyard, however, we could reconstruct its shape according to the plan, based on some parts that so far remained in good condition. The results of this survey indicated that the Naga-une mounded tomb is a scallop shell-shaped mounded tomb of the Kofun period, 19.5m in length and was constructed in the second half of the 6th century AD (additional interment may be performed at the beginning of the 7th century). This allows the conclusion that the building of small scallop shell-shaped mounded tombs also continued in the second half of the Late Kofun period. Additionally, we assumed the possibility that this mound has a corridor-style stone chamber with horizontal side entrance because of the additional interment, and that many kinds of the Sue ware were put on the floor of this chamber, which was typical in the regions of Miyoshi and Shōbara City in the northern part of Hiroshima Prefecture and the San’in region.



長宇根10号墳

図版第 1



a. 墳丘全景（東から）



b. 墳丘全景（西から）

長宇根10号墳

図版第2



a. 堆肥腐葉土堆積状況（北から）



b. 方丘部（円丘部頂から）

長宇根10号墳

図版第3



a. 方丘部（南南西から）



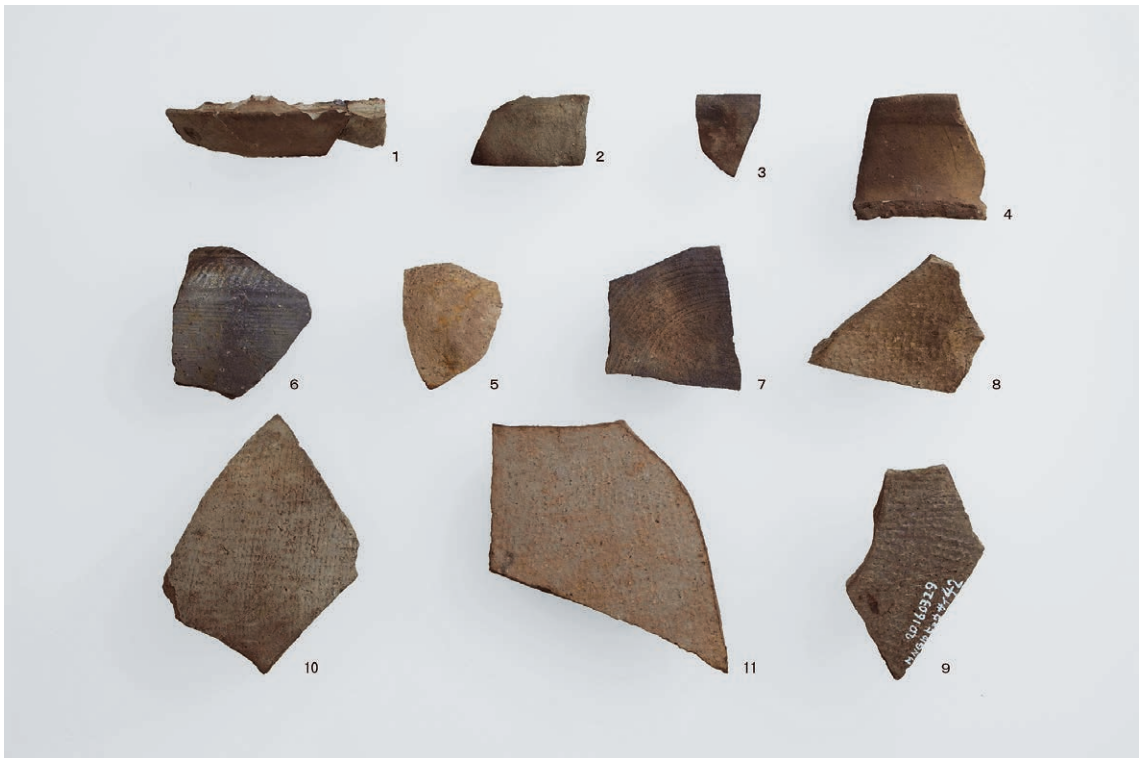
b. 円丘部礫散在状況（方丘部頂から）

長宇根10号墳

図版第4



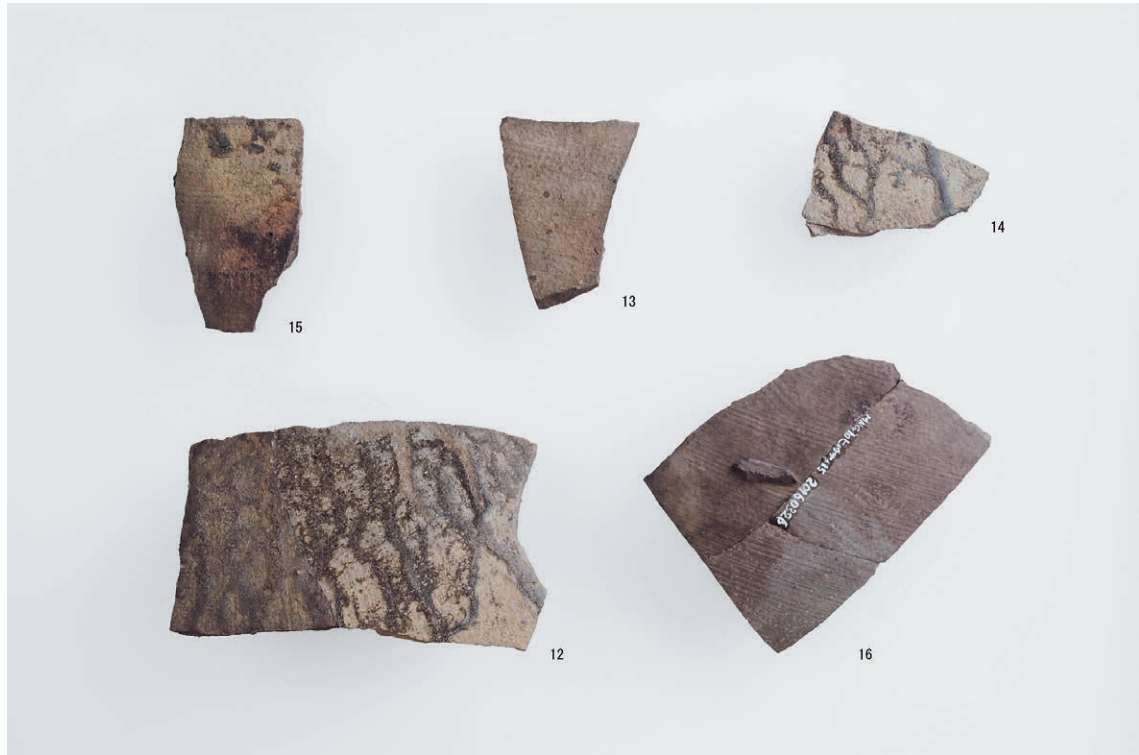
a. 東側崖面（東から）



b. 長宇根10号墳表採須恵器（1）

長宇根10号墳

図版第5



a. 長宇根10号墳表採須恵器 (2)



b. 長宇根10号墳表採須恵器 (3)

長宇根10号墳

図版第6



a. 栗屋高塚古墳石室開口状況（南から）



b. 栗屋高塚古墳円丘部（北東から）